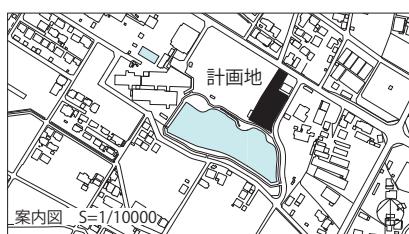


加茂野交流センター あまちの森
Kamono Civic Center "AMACHI NO MORI"
2016



埋め立てられようとした池をみんなで守りました。風景をどう味わうかという事より、メンテナンス性をとる人達との戦いでした。

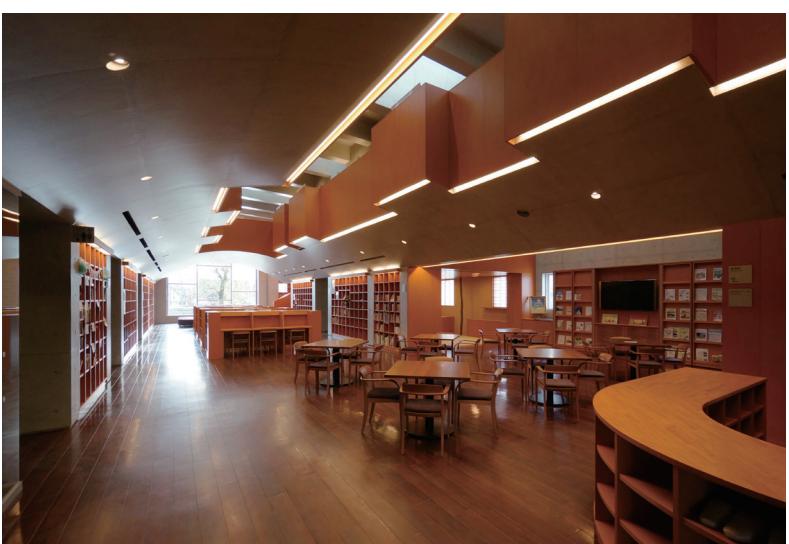
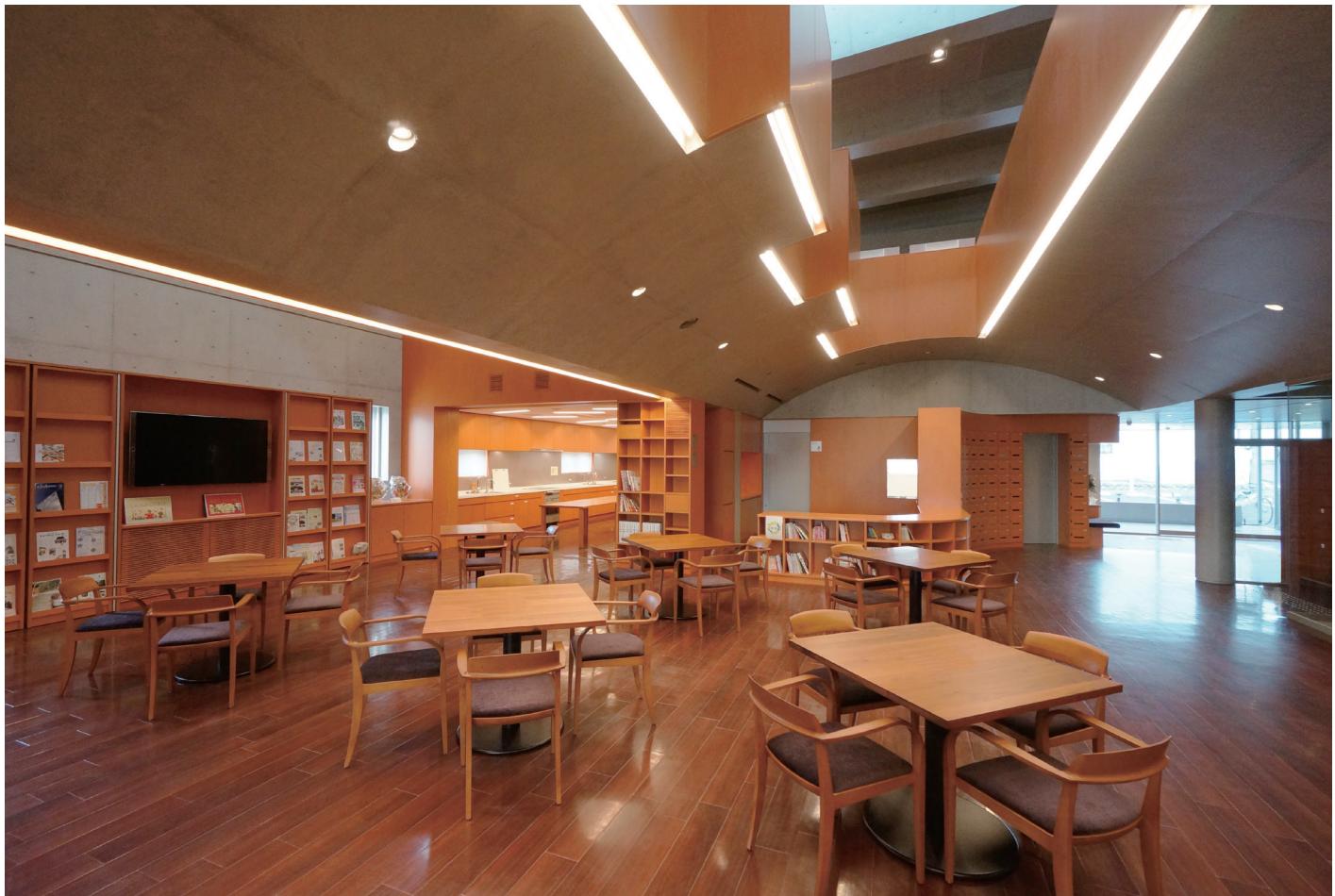


豊かな自然を背景に地域に根差した交流拠点

美濃加茂市は岐阜県南部に位置し、名古屋近郊ながら豊かな自然に恵まれた街で、現在も人口が増え続けています。

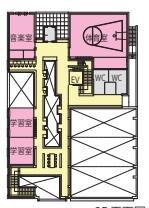
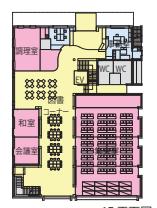
その市内でも特に人口増加の著しい加茂野地区に新たな交流拠点を生み出すため、この建物が計画されました。延床面積 1379m²ですが小規模ながらも地域の生涯学習の要として、天乳池を背景に落ち着いた雰囲気の住民の

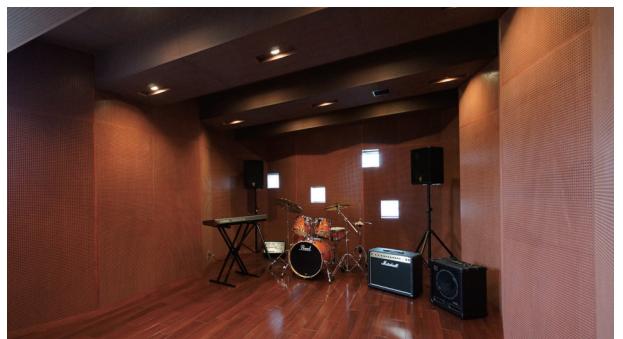
集いの空間を提供しています。外観はコンクリート打放しですが、本来タイル貼りの下地として用いられる MCR 工法を仕上げとして採用し、無表情な打放し面にランダムな陰影を作り、独特な表情を作り出しました。



地域に開かれた「アメニティ・ストア」

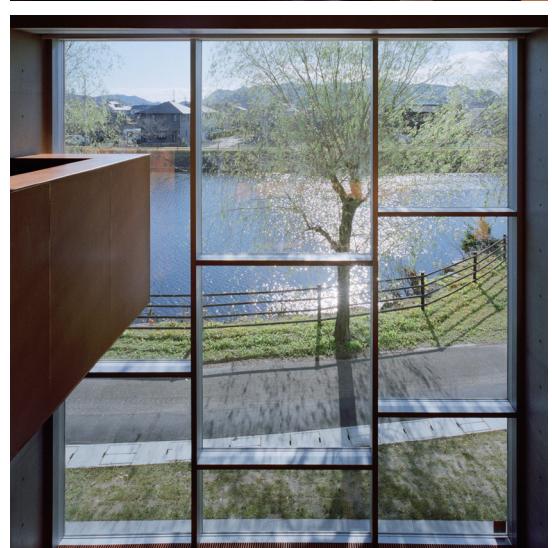
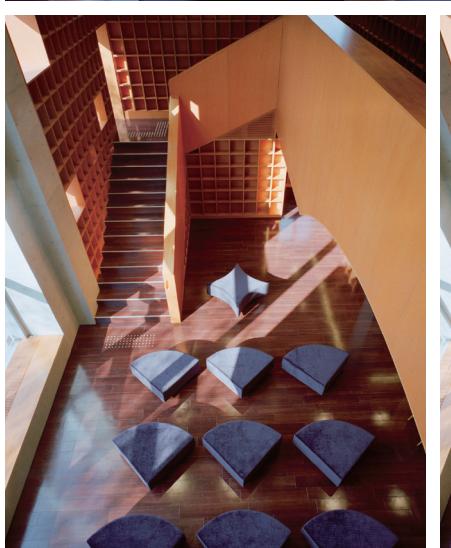
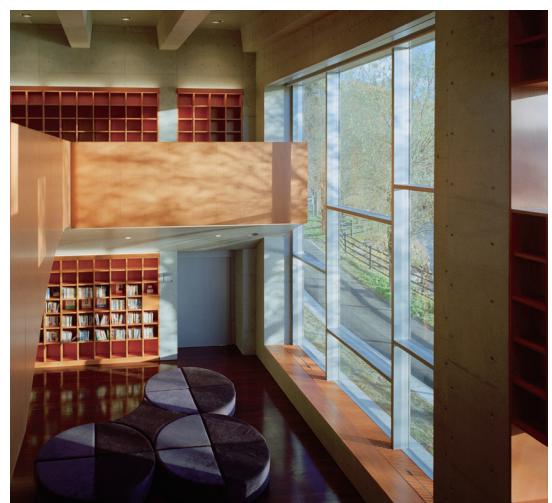
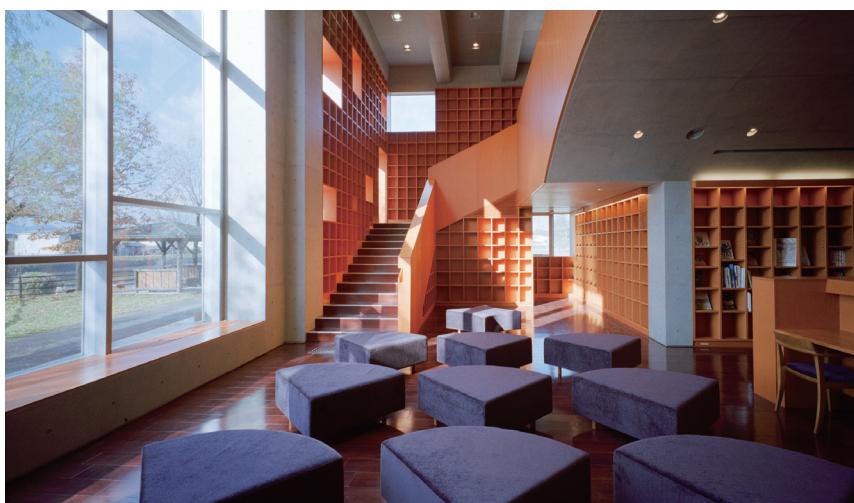
ロンドンの「アイデアストア(商店のような図書館)」や、「サードプレイス」という概念をさらに発展させた「アメニティストア」(アメニティ=市民活動、音楽、芸術、図書、創作、料理、託児・・・)をコンセプトとした新しい公共施設を目指しました。人と人が交流し、様々なことに巡り合える、誰にとっても「とびきり居心地のよい場所」になることを願いました。共用部には本を置き、施設の複合化を図りました。同時に施設の計画や運営への市民参画を目指すことにより、この新しい公共の場所が、地域全体の活性化につながる考えています。住民の人達と共に本・レコード等を集めて 20000 冊以上の本を分析して本棚に並べました。





2階の共用部も壁面が木製書架となっていて1階同様に木の温もりが感じられる空間となっています。

卓球やバスケットができる体育室や防音設備を備えバンド演奏のできる音楽室、学習室等の諸室があります。



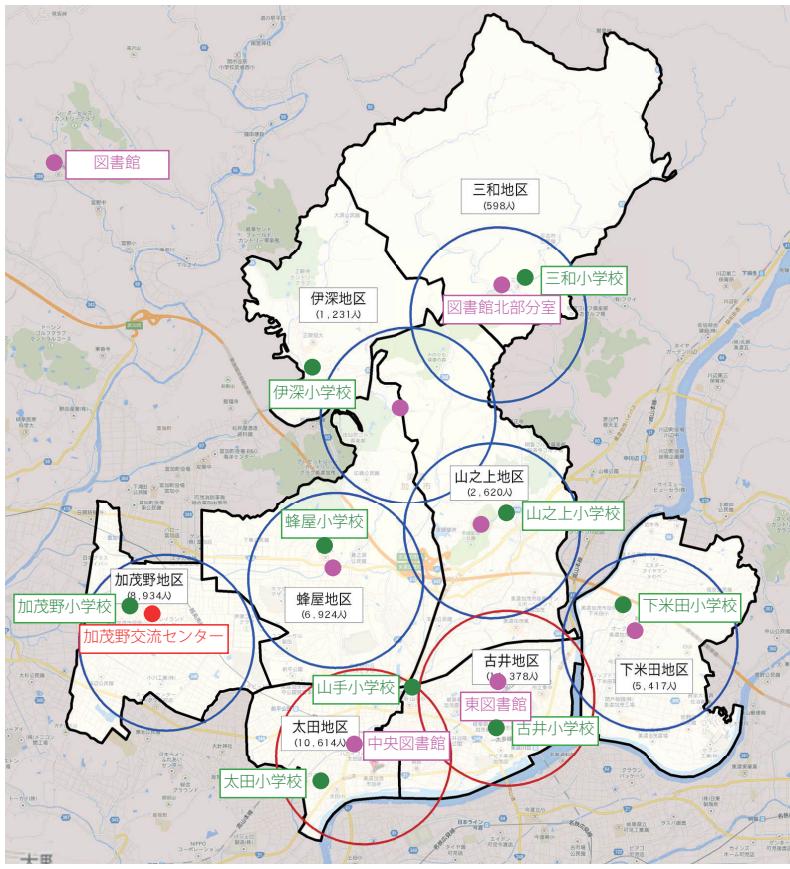
図書コーナー

組合せを色々変えられる移動可能な家具を家具を考えました。(写真左下2枚)

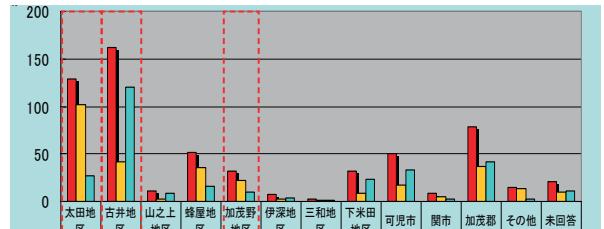
図書コーナーから2階への階段部分に天乳池を望む大きな窓を作り自然や季節の移り変わりが感じられる設えとしています。(写真右下)

市内公共施設を調査／図書館機能の提案

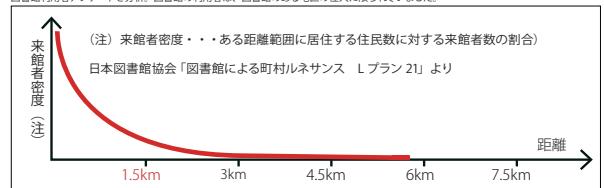
地域住民の要望だけでなく、他施設とのバランスも踏まえて建物内容を計画することが求められました。そこで市内全域のマップをつくり、公共施設を全てプロットしました。図書館の利用者アンケートを見ると、利用者はほとんど太田・古井の住民に限られ、他地区の住民が図書館を利用できていないことがわかりました。これは子どもや学生など車を使えない人々が、太田・古井にアクセスできなかったからです。若い人口の多い加茂野地区にも図書館や書店が全くなかったため、交流センターの中に図書館機能を作るべきだとワークショップで提案し、賛同を得ました。



市のマップを作成し、公共施設配置を分析。計画地に図書館・書店がないことがわかりました。



図書館利用者アンケートを分析。図書館のある地区の住人に限られています。



図書館の利用者は徒歩圏内に限られる。「図書館による町村ルネサンス L プラン 2」より



市内図書館も全て見学し、大きさや使われ方を調査しました。



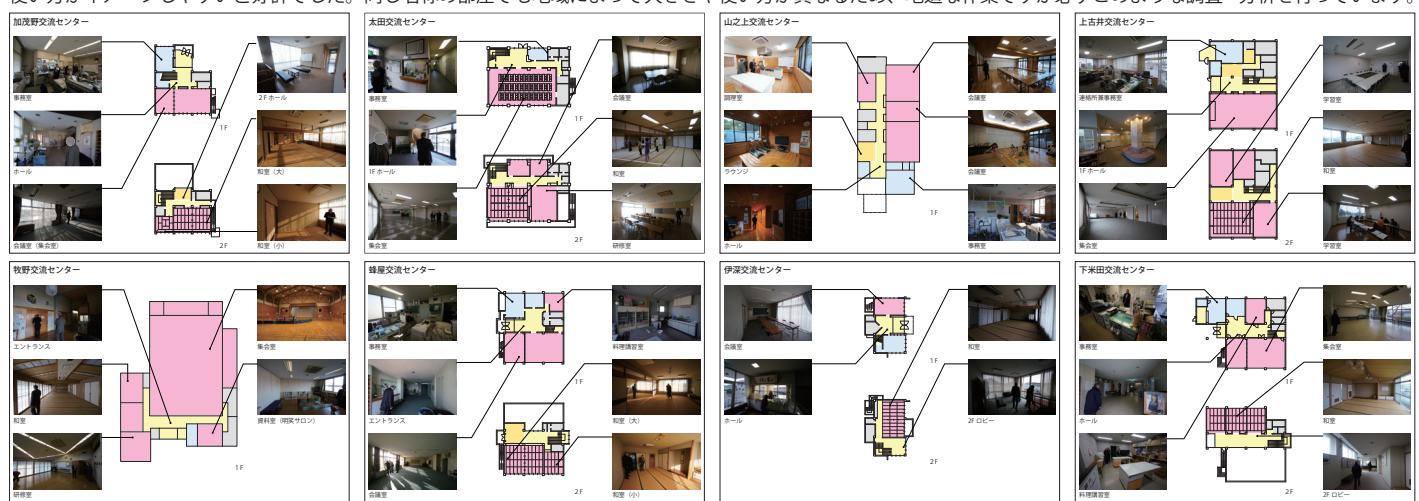
ロンドンの「アイデア・ストア」を参考に図書館機能を提案

図書館に関する文献・資料を収集し研究

地道な現状分析と、綿密な条件整理

建物内容を考えるに当たって、まず市民がどんな部屋が欲しいのか、ここで何をしたいのかを整理することからはじめました。

市内の全ての交流センターを実測して図面を作り、部屋のレイアウト、大きさ、使われ方、必要な備品まで細かく分析しました。その後、全施設の図面を同じスケールで比較し、どんな大きさのどんな部屋が欲しいか、ワークショップで自由に意見を出し合ってもらいました。この手法は、建築の専門家でない市民でも部屋の大きさ・使い方がイメージしやすいと好評でした。同じ名称の部屋でも地域によって大きさや使い方が異なるため、地道な作業ですが必ずこのような調査・分析を行っています。



市内の全ての交流センターを実測。各部屋の大きさやレイアウト、備品の種類まで細かく調べるとともに、CADで図面を作成。



各部屋ごとに、全施設の図面を同一スケールで比較

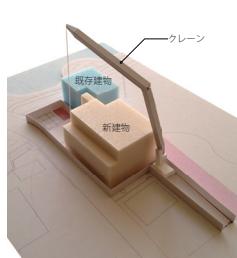
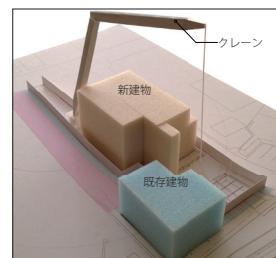
地域住民との案とともに比較しながら案を検討



利用者、管理者に練り返しヒアリングを行いました

ワークショップのはじまり

市民が独自に作って市に提出した計画案が存在することがわかり、敷地内にある古い交流センターを解体せずに工事中も使い続けたいという意見も出ました。よって配置計画、建物規模、プログラム等、建築に関する一切をみんなで考え始めるところからワークショップはスタートしました。



約1年間ワークショップを繰り返す

説明会のような形式では、どうしても「設計者に建物を作ってもらう」という雰囲気になってしまいます。市民、行政、設計者が図面や模型を囲み自由に意見を出し合うことで、市民のあいだに「自分達が建物を作り、責任を持って育てる」という意識が生まれ、和気藹々とした楽しい集いになりました。このようなワークショップは建物を考える場を超えて、市民同士が仲良くなり、自分たちで街の今後を考えていく契機になります。



ワークショップを経て、大きく姿を変えた建築

ワークショップで色々な意見を取り入れることで、プロポーザル案とは全く違った実施案が完成しました。



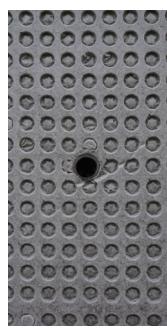
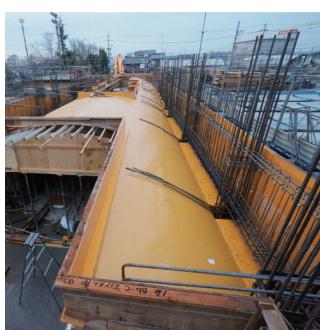
内部空間のスタディと詳細設計

我々が提案した図書館機能は、共用部に組込む形で建物の中心に配置することにしました。書架は柱と柱の間に埋め込むように設置することで、限られたスペースを有効に利用しました。図書コーナーにはハイサイドライトをもうけ、自然の光と風を取り入れる計画としました。



施工／RC打放しによる複雑な形状・仕上げの実現

建物は内外部の多くがRC打放しであり、曲面や台形断面の梁など、打設前の綿密な計画と難易度の高い施工が求められました。R本来タイル貼りの下地処理として用いられる「MCR工法」を外壁仕上げとして採用し、表面に無数の小さな凹凸をつくることで、ローコストながら豊かな表情のある仕上げとしました。打設にあたっては、凹凸となるべく干渉しないよう、一般的なPコーンではなく小径の土木用チューブコーンを採用しました。



地産材を使ったオリジナル家具のデザイン

図書コーナーの家具は我々が全てこの建物のためにデザインし、県内家具メーカーである飛騨産業(株)の協力のもと製作されました。岐阜県産のブナ、アベマキ等を使うことで、助成金を活用してローコスト化を図るとともに、地産材の活用にも貢献しました。



開館後も賑わい続ける、まちづくりの核

建物は2016年12月に竣工し、以来多くの人が毎日賑わっています。地域住民がワークショップを開いて図書コーナーの本を集めるなど、単なる貸館利用にとどまらない様々な活動がスタートしています。完成した建物は建築家の手を離れ、市民がつくり、育てるものになります。地域に根差した交流の場として、未永く愛されることを願っています。



雑誌掲載

